

「感動創庫」をになう一員です

— L F C 株式会社 —

職場
ルポ



(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝

取材先データ

LFC株式会社

〒501-0472 岐阜県本巣市下福島113番地

TEL 058-324-9888 FAX 058-324-9877

■代表取締役会長: 井上 武 ■代表取締役社長: 井上 剛典

■設立: 2003 (平成15) 年6月

■事業内容: 物流加工事業、アパレル物流、通販専用物流



keyword: 知的障害、特別支援学校、運輸・物流業

POINT

- ① 一気に多人数を雇用、職場に定着しやすく
- ② 「素直な心」と「向上心」で一人ひとりが成長
- ③ 会社の戦力として生かす

WORKSHOP REPORT



LFC 井上剛典社長

大家族主義の経営で、障害者雇用

東海道線の岐阜駅から10キロほど西方向の田園地帯に「LFC株式会社」がある。ブルーの外観が目印の大きな建物だ。

LFCは2003年、レディースのフォーマルウェア中心の「ラブリークイーン」の物流部門を分社化して誕生した。戦後すぐ、井上剛典社長の母方の祖父母がラブリークイーンを創業し、両社の会長を務める父親の井上武さんが大きく成長させた。長男が2009年にラブリークイーンの社長を引き継ぎ、次男の剛典さんが今年6月にLFC社長を引き継いだ。

「LFCのメインは、アパレルの物流業です。レディースのフォーマルウェアのほか、紳士服、子ども服、カジュアルやアクセサリーを扱い、量販店や直営店で販売

しています。また、浅田真央さんのCMで知られる『エアウィーヴ』の物流の1拠点にもなっています。お客さまに感動していただけける倉庫でありたいという思いから、昨年1月に『感動創庫』の商標登録をとりました。感動創庫はわれわれが目ざすゴールでもありません」

アパレルのなかでも最高のクオリティを求められるという、ブラックフォーマルを取り扱っている。

「その物流ノウハウが蓄積されています。修正加工に熟練の職人技を持つ技術者がいます。シワ直しやほつれの修正などをワンストップで取り扱い、お客さまのご希望に合わせた加工ができると思っています」

社名のLにはLife（人々の生活）、FにはFashion、CにはCommunicationの意味を込めた。

「かつて、ラブリークイーンは利益中心の会社で、上場を目指して事業を拡大していました。2000年に量販店がつぶれたりして大赤字を出したことから、人を大切に経営に切り変えました。その3年後に設立されたLFCは、大家族主義経営の考え方に基づき、従業員が幸せになる会社を目指しています。当時、私は別の仕事をしていましたが、父や兄からその考え方を聞き、非常に大事だと思っています。毎年、社内向けに社長指針をつくっていますが、今年は会長の考え

をベースに、私の思いを入れました」

従業員127人。そのうち社員は34人で、スタッフ（パート）が93人。障害者は、社員9人（知的障害8人、知的障害+身体障害1人）、スタッフ2人（聴覚障害1人、知的障害1人）。従業員の離職率は低く、定年退職制度はない。高齢者も含む「お母さん世代」の女性スタッフが多く活躍している。

一気に6人採用。「居場所」ができた

障害者雇用は、井上武会長が2006年、日本理化学工業の大山泰弘会長の障害者雇用についての話を聞いたことがきっかけになった。すでにラブリークイーンでは障害者が働いていたが、人数を増やすのはなかなかむずかしく、LFCで雇うことを考えて、2010年8月、地元の特設支援学校から初めての就業体験を受け入れた。同年4月に、従事していたアパレル通販事業ごと、LFCに移ってきた剛典さんも面接に立ち会った。

「2011年4月に、一気に障害者6人を雇用しました。いま振り返ると、知らなかったからできたというのが、正直なところ。たまたまたくさん受け入れた就業体験の子たちを選びきれず、『みんな仕事ができるよね、途中で辞める子もいるかもしれない』と全員を採用しました。一気に6人の雇用がとれただけ大変かは

粥川兼次 監査役



わかっていませんでした」
 障害者の受け入れは、総務や人事も担当する監査役の粥川兼次さんが窓口となった。

「体験学習の受け入れのときから、現場では拒否反応がありました。『初めてのことで、具体的な指示や指導もないのに、どう対応していいのかわからない』という不安が出てきましたが、われわれもわからない。『まずは、自分たちの力でやれるところはやろう』という意気込みで始めましたが、このままではまずいと、ハロー

ワークや岐阜障害者職業センターのジョブコーチ支援などをお願いして、学校や行政、社員が情報を共有して受け入れを行ってきました」

社長の剛典さんは、結果的には6人同時に採用したことがよかったという。

「同期がいることで、自分たちのポジション、居場所をつくることができました。受け入れるほうも1人だとお客さんにしてしまいますが、6人もいると仕事をしてもらわないと現場がまわりません。そのような環境で、障害者が定着しやすい状況ができたのだと思います」

大家族主義の経営理念が、障害者雇用にも生きた。

「彼らが家族だったらどうするか。彼らをお客さんにするのではなく、どうしたら一人前の仕事ができる場、成長できる場を提供できるかを考えています。成長のスピードは人それぞれですが、みんな頑張っています。責任感を持って仕事をしている人も、マイペースで1歩ずつ成長している人もいます。若いので、勉強しなければならぬこと、教えなければいけないことはたくさんあります。うちの仕事ができるくらいの体力はついてきましたが、健康を気づ

かうこととか、社会人としての成長をフォローしていきたいと思っています」

素直力が素晴らしい

建物は20年ほど前のものだそうだが、「環境整備の徹底」をモットーとするだけに、手入れが行き届き、新しく見える。1階は物流課やプレス課、事務所など。2～4階の在庫課には、上下2段がけのハンガーにブラックフォーマルスーツなどがずらりと並ぶ。その数15万着。店頭で販売されるのは一部だそうで、品番はコンピュータで管理している。

商品は入荷後、直し、検査、プレス、検針、保管、事務管理、値札作成などを行い、出荷へ。障害者が行う作業は、値札付け、店頭から戻ってきた商品の値切り、服のアイロン機械通し、伝票の商品を集めるピッキング、出荷票に基づく店ごとの振り分けなど。大きな倉庫のなかを、社長が案内してくれる。

「障害者雇用をしていることを話さずに見学されると、障害者が働いていることに気づかずに帰られる方がほとんどだと思います。『大丈夫、できる、できる』と励ますとできるようになっていく。1回覚えたことはきちんとできます。4年が経った彼らの技量は、スタッフを1とすると、できる人は0.8ぐらいと、ほぼ同じレベルになっています」



アパレル製品が並ぶ「感動創庫」

LF Cでは毎日、朝礼を行う。全員で清掃、経営理念の唱和、誕生日スタッフのお祝い、元気の出るオリジナルダンス、ハッピー体操などで1時間かける。

「朝礼は、従業員全員が同じ方向を向いて働くステージのためのリハーサルだと考えています。質のいいサービスを提供できるように、全員参加の元気な朝礼をしています」

障害者の人たちも、朝礼はもちろんな本の読み合わせや部門別のミーティングなどに参加している。

「毎月1回の早朝勉強会にも参加していますが、『メモを取ろう』といっても、一般社員はそのうち忘れませんが、彼らは絶対メモをとり、自分の思ったことを書いています。彼らの一番の能力は『素直さ』です。いわれたことを素直にやるというのは、天性のもの。素直力は素晴らしいと思います」

角田識之の著書「生涯顧客が生まれる101のマジック」の週2回の読み合わせでは、全員に当番が回ってくる。障害者の人たちには事前に当たる箇所を教え、わからないことは上司に聞くように指導する。

「うちに就職しているのは、特別支援学校で一般企業に就職できる力をもった人たちですが、やろうという気持ちがあるので、わからない漢字の読み方は事前に聞いてきます。当番は一言感想を話すこ

とになっていますが、最初に就業体験をした川瀬は、『LF Cにはお客さんがたくさんいらっしゃいます。元気にあいさつをして、お客さんをお迎えしたいと思います』と話していました。いままで人前で話すことはまずないし、対面で話すことも苦手だった子たちができるようになっています」

粥川さんに、現在の職場の雰囲気聞いた。

「最初は、『自分の子どもを育てるだけでも大変なのに、会社で障害者と働けるというのは何事か』という反応からはじまりました。しかし、いまは、『放っておいたらあの子たちはどうなるのか、親は先に亡くなるので、厳しい環境で将来自立していくためには、企業が支援していかないと無理なのは』と考えるほど、みんなの理解が進んできました。職場での様子は十人十色ですが、自分からコミュニケーションをとっていく人はかわいがられていますね」

「二人前」を目指して、
それぞれが成長

勤務時間は、社員は8時45分から17時45分、スタッフは9時から16時で、障害者の人たちは基本、残業はしない。初任給は高卒より少し低めでスタートし、仕事に応じて昇給している。



棚橋良さん(24歳)は、入社4年目。データ入力、ハンガー替え、ハンガー整理などの仕事をしてきた。「在庫課」から、最近「返品課」に異動した。店頭から戻ってきた商品の値札を切る「値切り」作業を行いながら、「まだ慣れないので、値切り、袋破り、伝票チェックなど、できることを増やしたい」と話してくれた。

車いすに乗り、肩から上に腕をのばして値切りをし、かがんで商品を動かす。相当な運動量で大変だろうと思ったら、「全然問題ないです」。実は、中学2年生から車いすバスケットを始め、ユースの日本代表だった。「だった」というのは、年齢が上がったためで、今後は全日本の代表入りを目指す。下肢以外にも手と知的にも障害があり、障害の重いクラスのローポインターとしてフル出場。土日に試合があると、月曜日の出社が大変だとか。「オールドジャパンは、狭き門。練習量が少ない

返品商品の値札を切り取る作業をする棚橋良さん

職場 ルポ



入社して4年となる川瀬万純さん。検針作業に忙しい



物流課で値札付けを担当する渋谷拓矢さん

のでむずかしいけれど、候補に入れれば。社長も近くで試合があるときは応援に行く。2020年のパラリンピック東京大会での活躍を期待したい。

渋谷拓矢さん(21歳)は就業体験に来て、「いい仕事だな。働いてみたい」と思って、2011年に入社した。「在庫課」で仕事をした後、現在は「物流課」で出荷管理を担当している。「直接お客さまに届くので、ミスや失敗をしないよう気をつけています。ここでずっと頑張りたいです」

「彼は、1回覚えたことは間違えませんが、出荷の最後の見回り

エックをして帰ります」と社長が信頼を寄せる。渋谷さんは入社後に免許を取り、すぐ近くの自宅から車で通勤している。「勉強が大変で、学科試験は十数回で合格しました。ローンを組んで、車を買いました」。旅行とドライブが趣味で、最近では福井の方まで出かけた。「大阪のユニバーサルスタジオOに行ってみたいです」

川瀬万純さん(22歳)は最初に就業体験に来た。「この会社に入りた」という彼女の思いを知った職場の人たちは、受け入れを真剣に考えたそうだ。いまでは、ハンガー替え、値切り、伝票チェック、検針など、さまざまな作業がこなせる。「学校の先生が、この会社を勧めてくれました。初めてのことがいろいろあつて、仕事を覚えるのが大変でした。お給料で、服とか自分の欲しいものを買います。貯金もしています。この会社ですつと働きたいです」

質問にしっかり答え、「社長はやさしい」と笑顔で話す川瀬さんから、入社当初はほとんど話さなかったという姿は想像しがたい。4年間の職場での経験が、彼女をぐんと成長させたのだろうか。

神戸聖羅さん(21歳)は今年で入社3年目だ。「最初はわからなかったのですが、先輩の川瀬さんが優しく教えてくれました。朝の掃除が好きです。いまはいろいろな仕事を覚えています。働き続けていき



神戸聖羅さん。バーコードを読み取り、商品を仕分け整理する

たいです」

社長は、彼らと日々の交換ノートをしたいと考えている。

「まだ覚悟ができていないのですが、最低1年ぐらいいやりたいと思っています。スタッフがすごいのは、本当のお母さんみたいに目をかけて、叱ったりほめたりしてくれることです。障害者を育てるのが上手な課長もいます。就業体験に付き添う学校の先生から『生徒があんな笑顔でいることはみたことがない』とよくいわれます。やりがいを感じていることが笑顔にするのだと思います。彼らが気持ちよく働ける環境ができると思います」

母校で仕事体験を話す人も出てきて、彼らの成長を実感しつつ、男女のこと、家族のこと、経済的なこと、自立など、こ



商品のシワを取るプレス機を担当する杉山喜穂さん（21歳）

れからが気にかかる。

「預かる以上は、どこに行っても仕事ができるぐらいのレベルまで責任を持ちたいと思います。いまはみんな『新卒』という感じですが、将来は給料と障害年金で、シエアハウスなどに入って自立できるかもしれないし、結婚するかもしれません。これから、恋愛問題、お金、食生活など、問題が出てくると思います。いまは自力で頑張っていますが、さまざまな課題に総合的に対応できる人が社内にはいないと大変になってくるのかと思います」

世のためになる、 ワクワクできる会社に

玄関にはさまざまな表彰状が飾られ、1階の廊下にはサンクスカードや誕生日のメッセージカードが貼り出されている。

「田舎で地味な仕事をしていますから、『新聞にも載り、賞状もいただけの会社なのだ』というプライドを従業員に持つてほしいと思っています。これからは年6回、各課の人たちと食事会をしたいですね」

今後の物流業について、社長としての思いがある。

「店頭での販売は、確実に縮小していくと思います。人口が減り、ものが売れなくなる。メーカーさんから、『物流のコストを削れ』といわれるのは間違いありませんので、付加価値を見出していくことが必要です。A社とB社が同じサービスで同じ価格というとき、LFCを選んでいただくには何が必要なのか。『正義』という言葉は少し大げさかもしれないのですが、『世のなかのためになっているのはLFCだね』と選ばれる会社になりたいと思います」

障害者雇用と高齢者雇用は、これからも続けていくつもりだ。

「地域のためにも障害者雇用、高齢者雇用をしなければならぬ。彼らをお客さ



在庫課で活躍する佐々木裕志さん（21歳）

まにするのではなく、戦力として生かすことが、結果としてうちが勝てる力になるという考え方でやっていきたいと思っています。もう一つ、付加価値でいえば、たとえばラブリークイーンの販促物を提案して、商品と一緒に販促物も届けるとか、アパレル物流の困りごとをすべて解決できるようにできればと思います」

剛典さんは42歳。2代目社長として、会社のビジョンを描く。

「月曜日に行きたくて仕方がない会社にしたいですね。仕事が楽しい、仕事にやりがいがある。目標を持って自分が成長できる。この10年で、ワクワクできる会社になればと思います」

「素直でいい子たちばかり。話したそうに寄ってくるフレンドリーな子も多い」
障害者の人たちについて語る社長の生き生きとした表情から、彼らの成長を喜ぶ思いが伝わってきた。